

戦勝という共通の記憶：CIS諸国との協力によるロシアの歴史認識の正当化

西山, 美久
北海道大学国際連携機構特任：助教

<https://doi.org/10.15017/6777117>

出版情報：政治研究. 70, pp.71-110, 2023-03-31. Institute for Political Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

戦勝という共通の記憶

——C I S諸国との協力によるロシアの歴史認識の正当化——

西山美久

はじめに

第一節 旧ソ連諸国へのまなざし

第一項 エリツイン政権と戦勝記念

第二項 プーチン政権のアプローチ

第二節 共通の記憶

第一項 C I Sにおける戦勝の意味

第二項 協力の推進

第三項 協力の継続

第三節 先鋭化する対立

第一項 歴史認識問題の再確認

第二項 大祖国戦争史観の否定

第三項 プーチンの反論

第四項 C I S諸国との連帯強調

第五項 大祖国戦争史観の絶対性

おわりに

本稿は、近隣諸国からの反発がありながらも、大祖国戦争（独ソ戦）での勝利を中核とする歴史認識を正当化するプーチン政権の国際的取り組みを明らかにするものである。本稿ではとりわけ、ロシアと旧ソ連諸国からなる独立国家共同体（Commonwealth of Independent States、以下CISと略記）との協力関係に着目し、大祖国戦争史観を擁護する同政権の国際的取り組みの一端を示すことにしたい。

過去の記憶をめぐる対立は各地で観察されており、旧ソ連地域や欧州でも同様に生じている。歴史認識は政治を織りなす重要な要素の一つとされ、近年では「記憶の政治」として注目されている^①。プーチン大統領は、欧州解放やナチス・ドイツ撃破を強調する大祖国戦争史観を愛国主義の中核に据えており、国営テレビや歴史教科書等で現代史の重大事として取り上げられている^②。独立系調査機関レヴァダ・センターのレフ・グトコフは二〇〇五年の早い段階で、「プーチン政権が誕生したここ数年の間で戦勝の意義は増大した」と指摘している^③。こうした状況を捉えてか、モスクワ国際関係大学教授のオリガ・マリノヴァは、戦勝は「プーチン・ロシアの基礎となる神話」だと説いた^④。

戦争神話が称揚される中、ロシア国内では一部の歴史教科書の記述内容をめぐって議論が交わされた。国民の愛国心涵養を重視するプーチン大統領はかつて、「事実上、ロシア史について奥深く、客観的に記した教科書は存在していない」と不満を述べるに至った^⑤。プーチン政権は教科書記述に注目を付けつつ、近年ではその流れの中で国内法の改正も進めている。例えば二〇一四年五月に「ナチズムの復権」を禁じた規定を刑法に盛り込んだほか、二〇二〇年七月には憲法を改正して「祖国防衛者の記憶を守る」ことを明記した^⑦。

しかし、大祖国戦争での勝利を絶対視するロシアの歴史認識は、近隣諸国との軋轢を生んでいるのも事実である。例えば、バルト諸国やポーランド等はソ連とナチス・ドイツを同一視して二つの全体主義国家による占領の被害者だと主

張したり、ソ連兵士の銅像や記念碑を撤去したりして、ロシアの歴史認識に真つ向から挑戦している。中でも銅像や記念碑の撤去は「記念碑をめぐる戦争」とも言われており、注目されている。⁽⁸⁾近年では欧州諸国も彼らの主張に与し始めており、例えば欧州議会は二〇一九年九月にロシアの歴史認識を非難する決議を採択した。

ロシアは近隣諸国の反発を意識してか、外交の指針である「対外政策の概念」で歴史認識問題を重要課題の一つとして取り上げるに至った。そこでプーチン大統領は、大祖国戦争史観を正当化するために国際協力を図った。特に近年、イスラエルや中国との協力を進めており、首脳同士が戦勝式典に参加したり、専門家を交えた国際会議等を開催したりして、歴史認識の共通性を強調している。⁽⁹⁾

そういう意味では、旧ソ連諸国も無視できない。大祖国戦争での功績が評価され、「ソ連邦英雄」の称号が旧ソ連の各民族に贈られた。学者や軍将官が執筆者として名を連ねた一九八五年出版の『大祖国戦争大百科事典』によると、当該称号を授与されたのは、ウクライナ人二〇六九名、ベラルーシ人三〇九名、カザフ人九六名、グルジア人九〇名、アルメニア人九〇名、ウズベク人六九名、モルドヴァ人六一名、アゼルバイジャン人四三名とされている。⁽¹⁰⁾ロシアの民族間題を専門にするモスクワ大学教授のヴァレリー・ティシコフによると、各民族にとって称号は「自民族が戦勝に関与した輝かしい功績」であり、ソ連の諸民族が戦勝に大きな役割を果たしたことを示した。⁽¹¹⁾ティシコフに従えば、大祖国戦争での勝利は民族の垣根を越えた「共通の記憶」になるのだろう。

そのためか、プーチン大統領はロシアにとって「近い外国」とされるCIS諸国との協力を図っている。CISは一九九一年にロシア、ベラルーシ、ウクライナの三カ国首脳が創設を発表し、その後アルメニア、カザフスタン、キルギスなどバルト諸国を除く旧ソ連構成国の計一二カ国が加盟するに至った。⁽¹²⁾ところが、グルジアはロシアとの関係悪化を受けて二〇〇九年八月に正式脱退。⁽¹³⁾ウクライナは二〇一四年三月のクリミア併合以降CISから距離を取り始め、⁽¹⁴⁾二〇一八年八月には代表事務所の閉鎖も発表したが、⁽¹⁵⁾今のところ脱退には至っていないようだ。一九九五年一二月に国連総

会決議で永世中立国となったトルクメニスタン⁽¹⁶⁾は、二〇〇五年八月から準参加国の立場となった⁽¹⁷⁾。加盟国の増減がある中で、プーチン政権はC I Sを中心しながら旧ソ連地域の政治経済的な統合を図ってきた。その文脈の中で、歴史認識をめぐる近隣諸国との摩擦が強まり始めると、イスラエルや中国のみならず、C I S諸国との協力にも乗り出して大祖国戦争史観を正当化することにした。

その際、プーチン大統領は戦勝という「共通の記憶」を動員し、関係国との結束を図ることにした。これは、ロシア愛国主義の中核的要素である大祖国戦争史観をいかに擁護するのかという問題であり、ロシアのアイデンティティと大きく関係してくる。その意味で、歴史認識を正当化するためにC I S諸国と協力するプーチン政権の国際的取り組みに着目する意義はあるだろう。

以上の問題意識を念頭に先行研究を確認すると、歴史教科書の記述内容に対する不満表明のように、プーチン大統領が歴史を重視する側面が注目されており、過去の偉業の中でも特に大祖国戦争における勝利の記憶が利用されている⁽¹⁸⁾。この点に着目したポーランド国際問題研究所は、プーチン政権が自らの正当性を担保する「政治的武器 (Political Weapon)」の一つとして歴史を利用していると強調している⁽¹⁹⁾。対して近隣諸国は、戦勝を絶対視するプーチン政権の歴史認識に異議を唱えているが、ロシア人研究者はこうした異論・反論を「歴史の歪曲」と捉え、大祖国戦争史観と相容れない銅像撤去といった近隣諸国の対応を批判的なトーンで紹介している⁽²⁰⁾。このような状況を反映してなのか、先行研究は歴史認識をめぐる対立にも焦点を当てている⁽²¹⁾。また、プーチン大統領の発言等を分析して対立が続く中で自らを正当化するロシア外交に着目した研究も現れた⁽²²⁾。その他、外交政策の一環としてロシアが近年、C I S諸国と協力して歴史認識の正当性を発信していると指摘する研究も現れた⁽²³⁾。

もつとも、プーチン大統領の発言や歴史認識をめぐる対応を振り返ると、先述のように、ロシア単独で近隣諸国の異議申し立てに反論しているのではなく、イスラエルや中国の協力を得ながらロシアの正当性を発信している。特に大祖

国戦争での勝利は旧ソ連地域とも関わるため、プーチン政権はC I S諸国との協力に乗り出した。最近の研究でロシアとC I S諸国の協力が既に指摘されているが、それはここ数年の取り組みを簡単に紹介しているだけであり、歴史認識問題が先鋭化する前後の動きやC I S諸国の反応等が明らかにされていない。その意味で、ロシア側が自らを正当化する手段としての国際協力に着目する本稿の視点は意義あるものだと言えよう。²⁴⁾

このような課題に対して、本稿では以下のように議論を展開したい。まず第一節では、プーチン政権が歴史認識問題でC I S諸国との協力推進に乗り出している点を、関係者の発言等から明らかにしたい。第二節では、社会的調査や各国指導者の発言等を参照して、C I S諸国で大祖国戦争の勝利が肯定的に記憶されている点を示したい。その上で、近隣諸国からの反発が強まりつつある中、プーチン政権がC I S諸国との協力を本格的に進める点を明らかにしたい。第三節では、歴史認識をめぐる近隣諸国との対立が顕著になった近年の事例を取り上げ、同政権がC I S諸国との協力を継続して大祖国戦争史観の正当化に努める動きを紹介する。そして、おわりにでは、本稿全体をまとめるとともに、本稿に残された課題や展望について提示したい。

第一節 旧ソ連諸国へのまなざし

第一項 エリツイン政権と戦勝記念

モスクワの赤の広場で毎年五月九日に開催される戦勝記念式典は、今ではロシアにおける恒例行事の一つとなっている。節目の年には各国要人等が招待され、式典は盛大に行われる。ところが、ソ連崩壊直後はその扱いが現在と若干異なっていた。ソ連からの脱却を志向したエリツイン大統領は一九九二年から一九九四年までの三年間、戦勝記念式典を赤の広場で開催することはなかった。その代わりに、退役軍人やその親族等がモスクワ東部の「ボクロンナヤの丘」等

で自発的に行う記念集会を訪れ、戦勝の意義を簡単に述べるにとどめた。政権閣僚も同じように振る舞っており、例えばヴィクトル・チュルノムイルジン首相等は、退役軍人等が集まったモスクワ市内のゴーリキー公園を訪れ、彼らの功績を称えた。⁽²⁵⁾ ジャーナリストのレオニード・ラジホフスキーは当時の様子について、「ソ連時代と異なり」いかなるパレードも開催されなかった」と回顧した。⁽²⁶⁾

ところが、ロシア国内で盛り上がる愛国感情を無視できなかったのか、エリツィン政権は態度を次第に変化させた。最高会議は一九九三年五月六日に戦勝五〇周年記念式典の開催を早くも決定し、五月一三日にはその準備に着手する。ことも矢継ぎ早に発表した。⁽²⁹⁾ これを受け、同年六月にエリツィン大統領は関係省庁に指示を出した。⁽³⁰⁾ このように数年前から準備が進められていたものの、開催場所についての言及は正式にはなかった。そうした中、エリツィンは戦勝記念日を控えた一九九五年五月に式典をモスクワの赤の広場で開催すると正式に発表した。⁽³¹⁾ また、退役軍人等に贈る戦勝五〇周年記念メダルの製造も発表し、国内の盛り上げを図った。⁽³²⁾

五月九日の式典には、クリントン米大統領、メジャー英首相、江沢民国家主席に加え、C I S からアゼルバイジャンのアリエフ大統領やグルジアのシェワルナゼ大統領等が出席した。式典でエリツィン大統領は、旧連合国との協力でナチス・ドイツを撃破できたと述べるとともに、「式典にはC I S 諸国に住む退役軍人が参加しており、彼らが共通の勝利という名において各国を結び付けている」とし、戦勝がロシアを含むC I S 諸国を繋ぐ共通の記憶だと強調した。⁽³³⁾

戦勝記念式典と並行して「大祖国戦争博物館」の開所式がモスクワ東部の「ポクロンナヤの丘」で行われた。C I S 首脳や各国要人等が出席する中、チュルノムイルジン首相は、「ソ連崩壊後にできた」新たな国境は退役軍人の皆さんを分け隔てていてのではない。……「戦勝は我々にとつて」共通の勝利である」とし、エリツィン発言を繰り返すように、ソ連なき後も戦勝が各国を結び付けていると説いた。⁽³⁴⁾

エリツィン大統領は一九九五年以降、五月九日の戦勝記念式典を赤の広場で毎年開催した。⁽³⁵⁾ 式典における演説内容を

確認すると、エリツインは戦勝をもたらした退役軍人の功績や旧連合国との協力によるナチス・ドイツ撃破等をこれまでどおり称えることはあっても、C I Sに直接言及することはなかった。³⁶これは他方で、節目の年に限定して意識的にC I Sを取り上げたとも評価できるが、いずれにせよ彼はロシアとC I Sにおける共通の記憶として戦勝を積極的に強調することはなかった。³⁷

第二項 プーチン政権のアプローチ

これに対して、大祖国戦争史観の正当化に努めるプーチン大統領は、C I S諸国との協力を積極的に進めることにした。例えば、戦勝記念式典での演説でC I Sに言及するだけではなく、各国首脳に祝賀レターを毎年発出するなどして戦勝が共通の記憶だと訴えている。また、ロシア外交の指針である「対外政策の概念」(以下、「概念」と略記)では、C I Sとの関係強化が謳われている。二〇〇〇年に策定された「概念」では「全てのC I S諸国との善隣関係や戦略的パートナーシップの発展に重点を置く」と基本方針が示された後、「文化的遺産を守るために協力を図る」とも謳われた。³⁸二〇〇八年版の「概念」では、「C I S諸国との多国間及び二国間関係の発展がロシア外交において優先される」と対C I S方針がより明確に示されたほか、同時に「共通の文化・文明の遺産を保護するために人道分野での協力も推進する」とされた。³⁹C I S諸国は「近い外国」とされるだけあり、ロシアとしても重要視する地域の一つなのだろう。また、二〇〇八年以降に採択された「概念」では、近隣諸国との対立を意識してか、自国の歴史認識を積極的に発信する必要性も記されており、⁴⁰C I S諸国との協力によって大祖国戦争史観の普及を図ろうとしている。

戦勝記念式典におけるプーチン大統領の発言をいくつか振り返ると、就任直後の二〇〇〇年五月の式典で「勝利の喜びは我々〔ロシアとC I S諸国〕にとって一つである。我々は一丸となって平和を守り、偉大なる祖国ソ連を守り、自国の存続を守り抜いた。我々はファシズムへの勝利に多大な貢献を果たした」と述べた。⁴¹C I S首脳への祝賀レターで

は、ロシアと各国が協力して勝利し得た点が強調されている。例えば、タジキスタン大統領に宛てたレターには「自由と平和な未来のために命を捧げた両国の息子娘たちの記憶は、我々の心の中に永遠に残り続ける」とされ、戦勝が国境を越えた共通の記憶だと強調されている。

プーチン大統領は二〇〇二年及び二〇〇三年の式典でC I S について直接言及しなかったものの、各国の貢献によってナチス・ドイツに勝利し得たとする祝賀レターを發出して連帯を訴えた⁽⁴³⁾。他方、二〇〇四年の式典ではC I S に再度言及して、「五月九日はロシア及びC I S 諸国の国民にとって共通の祝日である。我々は、恐ろしいナチズムとの戦いで共にあった」と述べた⁽⁴⁴⁾。

こうした流れの中で、プーチン政権はC I S との協力を模索し始めた。そこで、ロシアは二〇〇四年一月、アルメニア、ベラルーシ、カザフスタン、キルギス、モルドヴァ、タジキスタン、トルクメニスタン、ウクライナ及びウズベキスタンのC I S 九カ国と共同で「第二次世界大戦終結六〇周年記念」と題する決議案を国連総会第一委員会に提出した。同決議案では、各国が定める戦勝記念日や解放記念日が存在する現状に鑑み、五月八日と九日を「和解と記憶の日」にする⁽⁴⁵⁾と宣言された。採択された決議は、決議案の文言を若干修正しつつも、ほぼそのままの形で、かつ無投票で採択された⁽⁴⁶⁾。また、C I S 諸国との連帯を意識してか、各国の退役軍人等に贈る戦勝六〇周年記念統一メダルの製造も明らかにされた。メダルは直径三・二センチの丹銅製で、表面には勝利勲章、その下には「一九四五―二〇〇五年」の文字が、裏面には「一九四一―一九四五年の大祖国戦争における勝利六〇周年」の文字が刻印されることになった⁽⁴⁷⁾。

プーチン政権は国連決議や記念メダルのほか、戦勝六〇周年に向けたC I S 諸国との連帯を強調した。その関連で、ロシア国内では関連行事がいくつも催された。例えば、三月一五日から一六日かけてモスクワで国際会議「戦争・国民・勝利」が開催され、会議に出席したラヴロフ外相は「ロシアとC I S 諸国が主導したことで、国連は五月八日と九日を和解と記憶の日と宣言した⁽⁴⁸⁾」と述べ、戦勝記念式典におけるプーチン大統領のこれまでの発言同様に、ロシアとC I S

の協力を意識した。

プーチン大統領は戦勝六〇周年記念式典の前日五月八日にC I S首脳との非公式会合をモスクワで行い、各国との政治経済協力について述べつつ、「我々はナチスを撃破するに当たり、重要かつ多大な貢献を果たした」と語った⁴⁹。五月九日の式典では、アゼルバイジャン、アルメニア、ウクライナ、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン及びキルギスの首脳が見守る中、プーチンは「ソ連の全人民と全共和国は取り返しのつかない損失を被り、各家庭に悲しみが訪れた。五月九日はC I S諸国にとって聖なる日である」と述べ⁵⁰、戦勝がロシアとC I S諸国を結ぶ神聖な記憶だと世界に向けて強調した。

なお、プーチン大統領は「旧ソ連諸国」ではなく「C I S諸国」と言い切っている。「C I S諸国」だと、旧ソ連のうちエストニア、ラトヴィア及びリトアニアのバルト諸国が除外されるため、対象国が限定される。この点、モスクワ国際関係大学教授のオリガ・マリノヴァは、バルト諸国が歴史認識でロシアと対立している点に注目している。彼女曰く、プーチン大統領はその対立を意識しており、戦勝記念式典で「C I S諸国」と意図的に対象国を限定することで、歴史認識でC I Sとの連帯を強調したという⁵¹。

二〇〇八年から二〇一二年まで一時的に大統領を務めたメドヴェージェフもプーチン同様に戦勝記念式典における演説でC I Sに言及したほか、各国首脳に対して祝賀レターを发出して、戦勝が各国を束ねている共通の記憶である旨を主張した。例えば、二〇〇八年の式典では、「今日、戦勝記念日は、我が国だけでなく、C I Sや他の国々において何百万もの人々が祝っている」と述べ⁵²、戦勝の共通性を強調した（表①参照）。

このようにプーチン大統領や政権関係等は、旧ソ連諸国の中でも、歴史認識をロシアと共有しているであろうC I S諸国との協力を模索し、自らの正当性を世界に発信することを狙った。プーチン政権は、戦勝がまさに共通の記憶だと訴えたのであった。

【表①】 CIS 諸国への書簡発出、演説での言及

年月日	書簡の発出	演説での言及
2000年5月	○	○
2001年5月	○	
2002年5月	○	
2003年5月	○	○
2004年5月	○	○
2005年5月	○	○
2006年5月	○	
2007年5月	○	○
2008年5月	○	○
2009年5月	○	○
2010年5月	○	○
2011年5月	○	
2012年5月	○	

(出典) Концепция внешней политики Российской Федерации // Администрация Президента России, 15 июля 2008 (<http://kremlin.ru/acts/news/785>).

第二節 共通の記憶

第一項 CISにおける戦勝の意味

(一) 指導者の意識

CIS 諸国は、二〇〇四年一月にロシアと共同で決議案を国連総会に提案したほか、統一記念メダルの製造に賛同し、またCIS 諸国の首脳が二〇〇五年の戦勝六〇周年記念式典に出席したこともあり、歴史認識は共有されていたのかもしれない。もっとも、ソ連崩壊後、各国は自民族の歴史や文化を中心にして国家建設を進めたのであり、大祖国戦争の記憶は各国でどのように捉えられていたのだろ

うか。

そこで、まず指導者の意識を簡単に確認したい。ロシアと連合国家創設条約を締結しているベラルーシのルカシエンコ大統領は戦勝の意義をこれまでに何度も称えてきた。例えば二〇〇五年には、「ベラルーシ国民は……ソ連の諸民族とともに二〇世紀で最も残忍で血なまぐさい戦争の勝者となった。……大祖国戦争での勝利は我々の精神的な力の源」とし、戦勝が共通の記憶だと説いた。⁽⁵⁴⁾五月九日の戦勝記念日は同国の祝日とされ、パレード等が実施されている。

コーカサス諸国でも同様に五月九日の戦勝記念日が祝日として残っている。アゼルバイジャンのアリエフ大統領は「大祖国戦争の記憶と祖国のために犠牲となった人々の記憶は神聖だと何度も語っている。⁽⁵⁵⁾アルメニアのパシニャン首相は

かつて、「アルメニア人はソ連の諸民族と共に人類史上類を見ない悪であるファシズムへの勝利を祝った」のであり、「戦勝の記憶はアルメニアとロシアを結び付け、〔両国〕友好の揺るぎない礎となる」と強調した。⁽⁵⁶⁾ ナゴルノ・カラバフ紛争もあり、両国は自国民を鼓舞するために戦勝を巧みに利用しているとの指摘もあるが、⁽⁵⁷⁾ いずれにせよ、ロシアの歴史認識と大きく異なることはないようだ。

カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタンの五カ国からなる中央アジアでは基本的に、大祖国戦争での勝利が肯定的に評価されており、ほぼ全ての国で戦勝記念日が祝日として残っている。各国指導者は、アゼルバイジャン、アルメニア及びベラルーシと同様に戦争による多大な犠牲に触れるほか、戦勝に貢献した自国民の役割を強調している。⁽⁵⁸⁾

中央アジアの中でも特にウズベキスタンでは、一九九一年から二〇一六年まで大統領を務めたカリモフ大統領が五月九日の戦勝記念日を「追憶の日」に改称したところ、⁽⁵⁹⁾ 大祖国戦争史観を絶対視するロシアの専門家等は当該決定を歴史の歪曲だと批判している。⁽⁶⁰⁾ とはいえ、彼が戦勝記念に否定的だったわけではない。一九九五年の戦勝五〇周年の段階で、犠牲となった自国民一人ひとりの名前をまとめた全三六巻の書籍を出版し、その功績を称えた。⁽⁶¹⁾ 二〇一六年一二月から大統領を務めるミルジョーエフも同じように戦勝の意義を認めながら、ウズベク人の貢献も強調している。⁽⁶²⁾

モルドヴァでも五月九日が戦勝記念日とされ、戦勝は基本的に好意的に捉えられているが、その認識は歴代大統領で若干異なる。ヴォローニン、ティモフテイ、ドドンといった大統領は戦勝記念式典等に参加したりして、その意義を国民に示してきた。短期間ながらも、二〇一〇年から二〇一二年にかけて大統領代行として国政を預かったギンプヤルプもいる。特にギンプは戦勝についてロシアと距離を取り、⁽⁶³⁾ その扱いに差異がある。

ウクライナでも歴代指導者間で態度が異なっている。一九九四年から二〇〇五年まで大統領を務めたクチャマは、大祖国戦争史観を肯定するかのようになり、五月九日の戦勝記念日や一〇月二八日のウクライナ解放日を祝ってきた。⁽⁶⁴⁾ 「オレン

「革命」を率い、親欧米派と評されたユーシエンコは一〇月二八日を「ウクライナ解放日」と大統領令で正式に定めたほか、五月九日の戦勝記念日は「ウクライナ国民にとって偉大な勝利の日で、ウクライナで祝われる」と語った。⁽⁶⁶⁾ 同時に、ナチスに協力したとしてロシアが忌み嫌うバンデラやシユヘヴィチをウクライナ独立の闘士として持ち上げ、「ウクライナ英雄」の称号を死後に追贈した。⁽⁶⁷⁾ 対してヤヌコーヴィチは、大祖国戦争史観を肯定するかのようには赤旗の使用を許可したほか、「五月九日はウクライナ国民にとって神聖な日」だと強調した。⁽⁶⁸⁾ 二〇一四年の「マイダン革命」を経て大統領に就任したポロシエンコはこの見方を再転換し、歴史認識でロシアと距離をとった。

(二) 国民一般の意識

CISの一般国民の意識はどうだろうか。ロシアの社会学者四名がモスクワに住むアルメニア、ベラルーシ、カザフスタン、キルギス、ロシア、モルドヴァ及びタジキスタンの国籍を持つ一八歳から三八歳までの計四〇〇名を対象に調査を行った。ここでは、主として同調査を参照して大まかな傾向を掴みたい。

この調査によると、インタヴュー対象者の三分の二が歴史的に重要な出来事として大祖国戦争での勝利を挙げた。彼らの多くは、戦争が家族の歴史と答えたほか、戦勝をもたらした旧ソ連各国の貢献を高く評価した。それを示すように、回答者は例えば、「かつて一つであった国〔ソ連〕が戦争に勝利した」(三一歳アルメニア人男性)、「我々はただ一つの目的のために戦った。それはファシズムへの勝利である」(二六歳カザフスタン人男性)、「第二次世界大戦は立ちほだかる敵への勝利のためにソ連の諸民族を団結させた。これはソ連で生じた最も重要な出来事である」(二〇歳ベラルーシ人男性)等と指摘した。⁽⁶⁹⁾

国籍別に見ると、アルメニア人は回答者五〇名のうち、三九名が戦勝に貢献したソ連の役割を肯定的に捉えた。二二歳のある男性はインタヴューで「ソ連の役割は偉大であった。ソ連はファシズムに勝利し、欧州を解放した」と指摘し

た。⁽⁷⁰⁾ベラルーシ人の場合も同様の結果であり、回答者五〇名のうち三八名がソ連の役割を肯定した。⁽⁷¹⁾カザフ人も同様にソ連の役割を肯定的に捉えており、その数は回答者五〇名のうち四三名にもなった。⁽⁷²⁾

キルギス人は、回答者五〇名のうち二二名がソ連の役割を評価しながらも、戦争によって家族や親族を失ったとして、一五名が否定的な回答を寄せた。それでも、「五月九日を盛大に祝っている」のであり、キルギス人の多く（三七名）が五月九日を重要な祝日と述べた。⁽⁷³⁾モルドヴァ人は五〇名のうち二一名がソ連の役割を肯定したが、同時に自身の態度を明確にできない者も同数いた。⁽⁷⁴⁾タジク人は戦時下でのソ連やタジキスタンの役割を評価しており（一八名）、それを示すように「異なる民族が祖国のために一丸となって戦った」とコメントする者もいた。⁽⁷⁵⁾

同調査の対象外であった国民の意識も簡単に確認しよう。ウズベク人は戦勝を高く評価しつつも、それに貢献した自民族の役割に焦点を当てている。一例を挙げると、ウズベキスタン国立大学のある男子学生は「ウズベク人兵士は、ウクライナ、ベラルーシ、コーカサスをナチスから解放し、欧州の兄弟民族を助けるために、ヒロイズムを発揮した」と論文集に記している。⁽⁷⁶⁾このほか、現地での聞き取り調査によると、戦時下における親族の犠牲等も記憶されている。⁽⁷⁷⁾

ウクライナでは、同国の調査会社リサーチ・アンド・ブランディング社が二〇一〇年四月に二四州及びクリミアの住民二〇七六名を対象にした調査を実施し、八八%が「五月九日は重要な祝日」と回答した。ウクライナ南部や東部でその割合が高く九六%に達したが、西部では六二%と三〇ポイント以上の差がある。⁽⁷⁸⁾同社は二〇一三年四月に二一七八名を対象にした同様の調査を実施したところ、八三%が五月九日を重要な祝日と回答。地域別に見ると、南部で九一%、東部で八九%、キエフ等が位置する中央部で八七%だったのに対し、西部では五九%と前回同様に低い結果となった。⁽⁷⁹⁾これらの結果によると、特に西部で戦勝を評価する割合が低いようだが、ウクライナの大部分では概ね肯定的に捉えられているようだ。

このように見ると、各国では、戦勝が概ね肯定的に捉えられており、特に戦勝に貢献した自民族の功績が協調されて

いることが明らかになった。プーチン政権はこうした状況を踏まえ、歴史認識をめぐる近隣諸国との対立が激しさを増す中、C I S 諸国を巻き込んで大祖国戦争史観の正当性を国際的に発信していくのである。

第二項 協力の推進

プーチン政権が大祖国戦争史観を強調する中、ラトヴィアやエストニアでは、ナチス・ドイツが組織した武装親衛隊の元兵士等が当時の軍服に身を包み集会やデモを行った。また、ポーランド等では脱共産主義化の一環でソ連兵士の銅像や記念碑が撤去された。戦勝を重視するロシアとしては容認できるわけもなく、歴史認識をめぐるこれらの国々との対立を深めた。

政府系調査機関の全ロシア世論調査センターが二〇一〇年五月に公表した結果によると、「ソ連兵士の銅像撤去に反対」と答えたのは八三%にもなる。年齢別に見ると、一八歳から二四歳では「反対」「どちらか」というと「反対」が八〇%、六〇歳以上では八七%に達した⁽⁸⁰⁾。国内での不満も高まりはじめ、ロシアは大祖国戦争史観の正当性を世界に発信するために、戦勝を肯定するC I S 諸国との協力を推し進めることにした。

協力に先立ち、ロシア外務省のアンドレイ・デニソフ第一次官はインターファクス通信のインタヴューで、二〇〇八年一〇月一〇日にキルギスの首都ビシュケクでC I S 首脳会合が開催され、戦勝六五周年に向けた各種行事等について協議されると明かした⁽⁸¹⁾。ロシアはC I S の枠組みで大祖国戦争史観を普及させていくことを宣言したのである。

ビシュケクでの首脳会合には、一時的に首相に退いたプーチンに代わって大統領職を務めるメドヴェージェフのほか、アゼルバイジャン、アルメニア、ウクライナ、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、ベラルーシ、タジキスタン、トルクメニスタン及びモルドヴァから計一名の首脳等が参加した。今回の会合では、節目の年を意識して、また共通の記憶を演出するように、戦勝六五周年記念統一メダルの製造が決定された。メダルは直径三・二センチの丹銅製

で、表面には一等榮譽勲章が描かれ、その下に「一九四五年—二〇一〇年」の文字が配置される。裏面には「一九四一年—一九四五年の大祖国戦争における勝利六五周年」の文字が刻印される。⁽⁸²⁾その他、会合では戦勝六五年に向けた今後の基本計画も定められ、①C I S首脳声明の採択、②モスクワでの戦勝記念パレード実施、③退役軍人との面会実施、④戦勝に関する国際会議の開催といった計五一の取り組みが予定された。⁽⁸³⁾記念メダル、基本計画いずれも全参加国の賛同を得て採択された。

このように戦勝記念日への準備が進められる中、リア・ノーヴォスチ通信は二〇〇九年一〇月、関係筋の話として、二〇一〇年をC I Sにおける「大祖国戦争の退役軍人の年」に制定することが検討されていると報じた。⁽⁸⁴⁾ロシア外務省のアンドレイ・ネステレンコ報道官は、二〇〇九年一〇月九日にモルドヴァの首都キシナウ（キシニョフ）⁽⁸⁵⁾で開催予定のC I S首脳会合で戦勝六五周年の準備等について議論されるほか、リア・ノーヴォスチ通信の報道を認める形で、「退役軍人の年」に関する決定が採択予定だと明かした。⁽⁸⁶⁾

モルドヴァのC I S首脳会合ではメドヴェージェフ大統領のほか、アゼルバイジャン、アルメニア、ウクライナ、ベラルーシ及びモルドヴァの首脳が、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン及びトルクメニスタンからは第一副首相等が参加し、二〇一〇年の戦勝記念を見据えた各国の協力体制について協議を行った。その成果として、二〇一〇年がC I Sにおける「大祖国戦争の退役軍人の年」として定められたほか、基本計画にあった戦勝六五周年記念に関するC I S首脳共同声明も採択された。声明ではソ連兵士の銅像撤去や武装親衛隊元兵士等の活動を意識してか、「我々はファシズムから世界を救った前線の兵士と銃後の労働者の英雄的行為を忘れはしない。そのため我々は、自国の自由と独立のために犠牲となった人々の記憶を守り抜き、軍事墓地、記念碑、モニュメント及びオベリスク、さらにパルチザンや強制収容所で「犠牲となった」捕虜の墓地を保存し維持するために絶えず注意を払うことを求める」とされた。⁽⁸⁷⁾

このようにC I S首脳は、歴史認識をめぐるロシアと欧州諸国の対立を念頭に置き、欧州の立場を牽制したのであつ

た。カザフスタンのナザルバエフ大統領はその点を明確に理解し、「大祖国戦争の」事実が歪曲され、ファシズムとそのイデオログの致命的な危険性が人為的に和らげられようとしている。我々は、これまでも、現在も、そしてこれからも、全ての国々と団結して偉大なる勝利という共通の真実を守っていく」と語った。⁽⁸⁸⁾

もつとも、首脳間で若干の温度差が露呈した。例えば、各国首脳が各種文書に署名する中、二〇一〇年九月にモルドヴァ大統領代行に就任したミハイ・ギンブは、CIS首脳会合に出席しながらも、文書への署名を副首相に委ねた。全国紙『コメルサント』はこの点に着目し、「ランクでいうと副首相が署名」しており、「大祖国戦争に敏感なロシアを激怒させるいくつかの動きを既に見せている」と積極的にコミットしないモルドヴァを批判した。⁽⁸⁹⁾

ロシアは共通の記憶を演出するために、幅広い活動を展開した。その一つが議会レベルでの取り組みである。二〇一〇年四月にCIS議員会議がサンクトペテルブルクで開催された。この議員会議は、一九九二年三月にアルメニア、ベラルーシ、カザフスタン、キルギス、ロシア、タジキスタン及びウズベキスタンの議会が構成員として加わった。一九九三年から一九九五年にかけてアゼルバイジャン、グルジア（二〇一〇年脱退）及びモルドヴァの議会が、そして一九九九年にはウクライナ最高会議も加わるに至った。⁽⁹⁰⁾

会議に挨拶を寄せたメドヴェージェフ大統領は、ここでもブーチン発言を繰り返すように、「大祖国戦争での勝利はCIS諸国の国民にとつての財産だ」と指摘した。⁽⁹¹⁾ CIS議員会議代表を務めるロシア上院議長のセルゲイ・ミローノフは冒頭挨拶で「大祖国戦争におけるソヴィエト人民の勝利は、独立国家共同体諸国にとつて最も輝かしい、重要な祝日である。我々はナチズムとの過酷な戦いで一緒であった。そして、この聖なる日を共に祝っていく。……今日重要なことは、英雄的な年に関する歴史的真相を守り、その真実を後世に伝えることである。我々の共通の過去を歪曲することは容認できない」と述べ、各国が共有する戦勝の記憶の意味を説いた。⁽⁹²⁾

参加者はロシア側の発言に呼応するかにように、戦勝の記憶が各国を結び付けている点を強調した。例えば、ウクラ

イナ最高会議議長のウラジミール・リトヴィンは「我々は六五年間、勝利の日を祝ってきた。大多数のウクライナ国民はこの戦勝記念日への関係を感じている」と発言した。⁽⁹³⁾ カザフスタン議会議長のムハメドジャノフは、多くのカザフ人兵士が前線に派遣された点を強調しつつ、「(ロシア人の) イヴァン・パンフィロフ少将が指揮する第三一六狙撃師団がカザフスタンで結成され、モスクワ攻防戦で不滅の偉業を成し遂げた」と各民族の協力による勝利を強調した。⁽⁹⁴⁾

これらの議論を経て、会議では勝利六五周年記念に関するC I S 議員会議の声明が発表された。当該声明では、①戦勝の記憶を保持する必要な措置をC I S 議会及び国民に求める、②第二次世界大戦の結果見直しの違法性を主張する、③大祖国戦争の退役軍人を社会的法的に保護する、といった事柄が明記された。⁽⁹⁵⁾

このように、戦勝記念式典の準備が進められる中、全国紙『コメルサント』は、式典ではC I S 諸国に加えて旧連合国の軍隊も参加の上、モスクワの赤の広場で戦勝パレードが盛大に実施されると報じ、共通の記憶としての戦勝が演出されることが明らかになった。

二〇一〇年五月八日にメドヴェージェフ大統領はC I S 首脳と非公式会合をモスクワで行い、カザフスタン、ベラルーシ、ウクライナ、アルメニア、タジキスタン、トルクメニスタン、モルドヴァ、ウズベキスタンの計八ヶ国から首脳が参加した。メドヴェージェフ大統領は「(明日の) 式典は、共に戦い、勝利に貢献した先人に対する敬意の現れだ」と話し、戦勝が共通の記憶だと認識を改めて示した。⁽⁹⁷⁾ 二〇〇九年一〇月の首脳会合を欠席した首脳も今回は参加するに至った。

翌九日に赤の広場で開催された戦勝記念式典には、C I S からアゼルバイジャン、アルメニア、カザフスタン、タジキスタン及びトルクメニスタンの首脳計五名が出席したほか、メルケル首相や習近平国家主席等も連ねた。⁽⁹⁸⁾ メドヴェージェフ大統領は演説で、戦勝の意義や退役軍人等の貢献を強調しつつ、「戦争の結果を見直す試みは容認できない」と語り、歴史認識でロシアを批判する近隣諸国を牽制して自らの正当性を示した。⁽⁹⁹⁾

また、今回の式典には各国の退役軍人も招かれ、現役の兵士とともにパレードに参加した。ビシユケクでの決定に基づき二〇一〇年は「退役軍人の年」と宣言され、戦勝六五周年ということもあり各国の退役軍人がモスクワに集った形となった。この他、各国にあるロシア大使館は、現地に住む大祖国戦争の退役軍人に対して記念メダルを授与した。⁽¹⁰⁾

第三項 協力の継続

プーチン政権がC I Sと協力して大祖国戦争史観の正当性を発信している中、バルト諸国やポーランド等では、ソ連兵士の銅像撤去や武装親衛隊元兵士等による活動が続き、歴史認識問題はロシアにとって重要なイシューの一つであった。プーチン大統領は歴史認識問題に関する解決の糸口が見えない中、ロシアによる個別の取り組みではなく、C I S諸国との協力継続を決めた。

その手始めの作業として、二〇一一年六月に第二次世界大戦開戦七〇周年に関するC I S首脳共同声明を採択した。声明では「時間が経つほど、自国や欧州を解放した人々への感謝の念がますます強くなる。……戦勝は我々を結びつける歴史的出来事である」とされ、各国を結びつける戦勝の意義が改めて強調された。⁽¹¹⁾

戦勝が共通の記憶だという点を意識して、二〇一一年九月に開催されたタジキスタンの首都ドゥシャンでのC I S創設二〇周年に関する首脳会合では、政治経済等これまでの協力に関する協議のほか、歴史認識問題を念頭に置いた文書が採択された。例えばその一つとして、「C I S諸国民による勇敢さ及び英雄主義の記憶を永続化するための合意」がある。この合意では、「戦没者墓地及び戦没者追悼記念碑の破壊行為及び冒流行為を防ぎ、対処していく」ことで、戦勝に貢献したC I S諸国民の功績を守っていくと謳われている。⁽¹²⁾これは、近隣諸国で続くソ連兵士の記念碑や銅像撤去が念頭にあり、合意を採択したのであろう。また会合では、C I S創設二〇周年に関する共同声明も採択され、これまでの活動に触れつつも、「退役軍人を例にとり、若年世代の愛国心、諸民族友好、文化、歴史への尊敬の念を育む」との一文

も盛り込まれるに至り、C I Sとして歴史認識問題を無視できなかったようだ。⁽¹⁰³⁾首脳会合後、ラヴロフ外相は『ロシア新聞』のインタヴューに応じ、「記憶永続化に関する」合意は、我々共通の偉大な勝利の記憶（に関する取り組み）を継続する（ことを意味している）」と説明した。⁽¹⁰⁴⁾

二〇一二年一月にトルクメニスタンの首都アシガバードでの首脳会合では、プーチン大統領以外にも、アゼルバイジャン、アルメニア、ウクライナ、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、トルクメニスタン、ベラルーシ及びモルドヴァの首脳等が参加し、戦勝七〇周年共同事業の基本的な方向性を検討したところ、①戦勝に貢献した各民族の称揚、②退役軍人との交流、③軍事墓地、銅像及び記念碑等の保存に関する活動等を展開すべきとされた。また、六五周年に続き、戦勝七〇周年記念メダルの製造も検討事項とされた。⁽¹⁰⁵⁾

準備が進められる中、プーチン大統領は二〇一三年四月、国営テレビを通じて国民からの各種質問に答える「直接対話」を三時間以上にわたって行い、その中で「戦勝七〇周年記念式典の準備に関する大統領令に署名した」と明かした。⁽¹⁰⁶⁾大統領令でプーチンは、準備事項について定めつつ、「C I S 諸国や旧連合国、また国際機関等に対して、戦勝記念式典に関する準備や各種記念行事への参加を打診すること」との指示を出し、⁽¹⁰⁷⁾共通の記憶の演出を図った。

プーチン大統領は、二〇一三年一〇月にベラルーシの首都ミンスクで行われたC I S首脳会合に出席し、各国が協力して戦勝記念式典の準備を進める必要性に言及したほか、二〇一五年を「大祖国戦争の退役軍人の年」と宣言してはどうかと提案した。⁽¹⁰⁸⁾この「退役軍人の年」宣言は二〇一〇年に既に行われていたが、二〇一五年が節目の年であり、また戦勝に貢献した退役軍人への敬意の現れなのか、最終的に当該提案は承認されるに至った。⁽¹⁰⁹⁾また、アシガバード会合での協議を受け、戦勝七〇周年記念統一メダルの製造も決定された。今回のメダルは直径三・二センチの金属製で、表面には祖国戦争一等勲章と、その下に「一九四五―二〇一五年」の文字が、裏面には「一九四一―一九四五大祖国戦争での勝利七〇周年」の文字が刻印される。⁽¹¹⁰⁾

C I S 諸国との協力が展開される中、ロシアは更なる協力推進を図った。二〇一三年一月、戦勝行事や愛国心教育等について有識者を交えて議論する組織委員会「勝利」の会合がモスクワで開催され、陪席した外務省関係者は「C I S 諸国の多くがロシア主導の『退役軍人の年』に関する決定を支持してくれた」と情報共有するとともに、C I S の枠組みで大祖国戦争史観を拡散するための更なる取り組みを行う予定だと明かした。¹¹⁾

右発言を受け、C I S は七〇周年記念式典に関する共同事業基本計画を作成し、二〇一三年一月中旬から二〇一四年二月にかけて各国首脳が署名し、採択されるに至った。もともと、ウクライナのポロシェンコ大統領は、ロシアが一方的に併合したクリミアを意識してか、各国首脳の中で唯一、当該計画に署名しなかった。ウクライナの反発があるが、当該事業計画ではアシガバード会合での方向性を受け、①モスクワでの戦勝記念パレード開催、②各国首都での軍事パレード実施、③退役軍人との面会実施、④国際会議の開催、⑤パルチザンの墓地整備といった計画が計七九も列挙され、共通の記憶を意識した行事が多数盛り込まれた。¹²⁾ このようにC I S の枠組みで歴史認識の正当化が図られる中、ラヴロフ外相は「歴史を改ざんし、犠牲者と処刑者を同列に置き、そしてナチスト及びその支持者を擁護する試みは言語道断である」と語り、名指しこそ避けつつ歴史認識で対立する近隣諸国を批判した。¹³⁾

二〇一四年一〇月のミンスクでのC I S 首脳会合では、戦勝七〇周年に関する共同声明が採択され、これまで同様に戦勝に貢献したソ連の役割が称揚されたほか、犠牲者への哀悼の意も示された。また、歴史認識で対立する近隣諸国を念頭に置き、「戦争の教訓を忘却すること、戦勝の結果に対して歪曲された道徳的・法的評価をすること、犠牲者と処刑者を同一視すること、犠牲者の記憶を冒瀆すること、ナチスの名誉を回復することは冷笑的な試み」だと一蹴した。¹⁴⁾

議会レベルでの協力は、二〇一〇年と同様に見られた。二〇一五年四月にサンクトペテルブルクでC I S 議員会議が開催され、挨拶を寄せたプーチン大統領は「戦勝は共通の遺産」であり、「共通の歴史における〔戦勝という〕英雄的な一ページ、戦勝への誇り、友好関係や相互信頼という良き伝統は、C I S 諸国間の友好及び信頼の確固たる基礎となる」

とした⁽¹¹⁶⁾。会議ではロシア、アゼルバイジャン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、ベラルーシ及びモルドヴァの議会関係者が戦勝七〇年の意義を語った⁽¹¹⁷⁾。C I S 議員会議の共同声明も発出され、それによると「大祖国戦争での勝利は欧州解放の主要因」であり、「C I S 諸国民の犠牲の上で勝利した」。そして、「記念碑の保存、記念碑の侮辱及び破壊は容認できず、……〔C I S は〕歴史の書き換え、第二次世界大戦及びニュルンベルク裁判の見直しには反対」との立場である⁽¹¹⁷⁾。このようにC I S 議会関係者は、名指しは避けつつも、歴史認識でロシアと対立する欧州諸国を念頭に置いた内容を声明に織り込み、自らの立場を示したのである。

議会間での協力が盛り上がりを見せる中、ウシャコフ大統領補佐官は、二〇一五年五月八日開催予定のC I S 首脳非公式会合で戦勝七〇周年記念が主に議論されると明かした⁽¹¹⁸⁾。二〇一四年三月のクリミア併合でウクライナ側の態度が硬化したのか、ペスコフ大統領報道官によると、ポロシェンコ大統領は会合欠席を決めた⁽¹¹⁹⁾。首脳会合では、ウクライナ以外にも欠席した首脳がいたものの、それでもウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン及びベラルーシの大統領計五名が出席した⁽¹²⁰⁾。

会合でプーチン大統領は域内の経済統合といった社会経済問題について語りつつ、欧州諸国が提起する歴史認識問題について、歴史の書き換えはいわば「不都合な手段による企図（покушение）」であって、「勝利の歴史的遺産を守り、ナチスのイデオロギーや人種的・宗教的不寛容の思想が再興するのを防ぐために、あらゆることを行う必要がある」と指摘⁽¹²¹⁾。プーチン大統領の発言に刺激を受けたのか、ベラルーシのルカシェンコ大統領は「当時の英雄的出来事を忘却の彼方へ追いやり、戦争の結果を見直し、犠牲者と処刑者を同列に扱い、ナチズムを美化し、ナチスの犯罪者を復権させる試みを断固非難する」とロシアと対立する近隣諸国を念頭に置いたかのように発言した⁽¹²²⁾。キルギスのアタンバエフ大統領も、「このような偉大な勝利を忘れるべきではない」と共通の記憶としての戦勝を強調した⁽¹²³⁾。

歴史認識問題を意識した発言は、各国関係者でも見られた。例えば、カザフスタンのトカエフ現大統領は上院議員時

【表②】 CIS 諸国への書簡発出、演説での言及

年月日	書簡の発出	演説での言及
2013年5月	○	
2014年5月	○	
2015年5月	○	○
2016年5月	○	
2017年5月	○	
2018年5月	○	
2019年5月	○	
2020年5月	○	
2021年5月	○	
2022年5月	○	

(出典) Концепция внешней политики Российской Федерации // Администрация Президента России, 15 июля 2008 (<http://kremlin.ru/acts/news/785>).

代、CIS 諸国の取り組みを念頭に置いてか、「政治的利益のために大祖国戦争の歴史を歪曲することは容認できない。戦争の歴史的意義を正確に理解することは現役世代、そして将来世代にとって非常に重要」だと述べた。⁽¹⁴⁾

非公式会合で大祖国戦争の正当性を改めて確認したところで、ロシアは翌九日の戦勝記念式典でその意義を世界に発信した。プーチン大統領は今回の式典に多数の国家元首を招待し、習近平国家主席やラウル・カストロ国家評議会議長のほか、CIS からアルメニア、アゼルバイジャン、カザフスタ、タジキスタンの大統領等が列席した。⁽¹⁵⁾ アゼルバイジャン及びアルメニアの両大統領は非公式会合を欠席したが、式典には加わりロシアの歴史認識に賛同を示す形となった。

各国首脳が見守る中、軍事パレードでは、インドや中国のほか、CIS からはアゼルバイジャン、アルメニア、ベラルーシ、キルギス、カザフスタ及びタジキスタンの軍隊が参加した。プーチン大統領は演説で、「彼らの祖父や曾祖父は前線や銃後で肩を並べた」とCIS 諸国による協力を強調した。⁽¹⁶⁾ 表②のように、プーチン大統領は式典の演説でCIS に毎回言及することはないものの、各国首脳に対して祝賀レターを毎年発出して戦勝が共通の記憶だと強調している。

以上のように、プーチン政権はCIS の枠組みを活用して、歴史認識で異を唱える近隣諸国を牽制し、大祖国戦争史観の正当性を発信したのであった。共同声明の発出や記念メダルの製造等これまでと同じ取り組みを続けながらも、各種声明等では戦勝の意義を称えつつ、歴史認識問題を踏まえて「歴史の歪曲」や「歴史の書き換え」といった言葉を用いてロシアと対立する

近隣諸国に反駁してきた。各国首脳も「歴史の書き換え」「歴史歪曲」に直接言及し、ロシアの立場に寄り添った。こうしてプーチン政権は、ロシアによる独自の歴史解釈ではなく、他国からも支持されていると訴えることで正当性を担保しようとした。

第三節 先鋭化する対立

第一項 歴史認識問題の再確認

歴史認識をめぐる対立が続く中、プーチン大統領はC I Sとの協力を今まで同様に図った。二〇一七年一月一日にロシア南部のソチでC I S首脳会合を開催し、二〇二〇年をC I Sにおける「戦勝七五周年記念の年」にすると宣言した。⁽¹⁷⁾ 二〇一〇年及び二〇一五年は「退役軍人の年」とされたが、今回は戦勝を前面に押し出すつもりなのだろう。

共通年の制定を皮切りに、協力は進められた。ロシア全国紙『コメルサント』によると、C I S諸国は、歴史認識に関する欧州諸国の反論を念頭に置き、戦勝に貢献したC I S諸国の役割を過小評価したりする歴史歪曲を非難する共同声明を採択する予定だという。同紙の取材に応じた複数の関係者は、「大祖国戦争はC I S諸国を結び付けており、これに疑義を挟む余地は無い」と言明し、共同声明は今までどおり採択される見通しだとした。⁽¹⁸⁾

二〇一九年一月一日にはアシガバードでC I S首脳会合が開催され、プーチン大統領のほか、アゼルバイジャン、アルメニア、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ベラルーシ及びモルドヴァの計一〇カ国から首脳が出席した。会合では共同声明が採択され、その冒頭では「我々は、各国の国民がファシズムに対する完全かつ最終的な勝利のために決定的な貢献をしたことを心から誇りに思う」と記され、戦勝が各国共通の記憶だという点が再確認された。その上で、終わりが見えないロシアと近隣諸国の歴史認識問題を念頭に置き、「ナチズムに

抵抗した欧州及び全ての人々の勇気を高く評価したい。そして、ナチズムからの欧州解放で犠牲となった人々の銅像、記念碑、追悼施設、墓地といった英雄たちの慰霊碑保存に努めて欲しい」との文言が盛り込まれた。⁽¹²⁹⁾

各国首脳は、同声明の内容を繰り返すように戦勝への思いを語った。プーチン大統領は「(五月九日は)偉大なソ連人民の勝利であり、我々は皆その勝利に直接関係しており、この勝利の相続人である、という点について自分は完全に賛成だ」と述べ、戦勝がC I Sを束ねる共通の記憶だと改めて強調した。⁽¹³⁰⁾ カザフスタンのトカエフ大統領は歴史認識問題を念頭に置き、「カザフ人を含む(ソ連の)全民族がナチス・ドイツの脅威に対して一丸となって立ち向かった。我々カザフスタンは、第二次世界大戦の歴史を歪曲することに断固反対」と言明した。⁽¹³¹⁾ ベラルーシのルカシエンコ大統領は各民族の功績を強調して次のように語った。「大祖国戦争での勝利は、偉大なソ連人民によってもたらされた。ブレスト要塞攻防戦やレニングラード包囲戦で犠牲となり、またスターリングラードやクルスクで戦い、そして欧州を解放しベルリンを襲撃したロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人、カザフ人、アルメニア人、アゼルバイジャン人、モルドヴァ人、グルジア人、キルギス人、タジク人、トルクメン人及びウズベク人等は自身の民族性を考えることはなかった。彼らは団結して赤旗をドイツ国会議事堂の頂上に掲げた。つまり、我々の勝利は共通のもので、不可分なのだ」⁽¹³²⁾。

このように、プーチン政権は歴史認識問題の存在をC I S諸国と共有し、大祖国戦争史観の正当化を図った。ところが、歴史認識をめぐるロシアと近隣諸国の対立は先鋭化の様相を呈しつつあり、プーチン大統領はその対応に迫られた。

第二項 大祖国戦争史観の否定

ロシアがC I S各国と協力して戦勝七五周年に向けた調整・準備を進めていたちょうどその時、欧州は大祖国戦争史観を真っ向から否定してみせた。

ポーランドは二〇一九年九月一日、第二次世界大戦開戦八〇周年式典を首都ワルシャワで開催した。各国の首脳等が

見守る中、ドウダ大統領は次のように述べて、ロシアの歴史認識に異を唱えた。九月一日にナチス・ドイツが、九月一七日にはソ連がポーランドに攻め込んだことで、ポーランドは地図上から消えてしまった。二万二〇〇〇名にもなるポーランド人将校のほか、知識人、一般国民、子供たちも多数犠牲となった。戦後のポーランドはソ連の占領下であり、第二次世界大戦は政治的な意味において一九八九年まで続いた。⁽¹³⁾

プーチン大統領は今回の式典に招待されず、歴史認識をめぐる両国の対立が関係していたのだろう。『コメルサント』紙によると、ポーランドは欧州連合やNATO加盟国のうち自国のパートナーを招待したという。⁽¹⁴⁾この点、ポーランド外務次官は現地のラジオ番組で、「現在のロシア政治から目をそらすことは難しい。この悲劇的な記念日を歴史的真実の精神で迎えたい。ロシアはこの点に興味がなく、〔歴史認識をめぐる〕最近の出来事が彼らの立場を示している」とし、プーチン政権の立場は受け入れ難いと言明した。⁽¹⁵⁾

これに対して、ロシア側は反論を試みた。ペスコフ大統領報道官は、ロシアが不参加であれば「完全とは言えない」と若干トーンを抑えながらもポーランド側の判断に不満を表明した。上院議員のアレクセイ・プシニコフは、「ポーランド側は第二次世界大戦に参加した国々との親睦を深めるのではなく、反ロシアを目的にした新たな道具として今回の記念日を利用しようと考えた。その意味するところは、ロシアに対する政治的攻撃である」と非難した。⁽¹⁶⁾

こうした中、「ロシア歴史協会」のナルイシキン総裁は、『イズヴェスチャ』紙のインタヴューで次のように自国の立場を擁護した。「ソ連がナチス・ドイツ打破に貢献したのは自明である。欧州の半分を解放した。……ロシアの指導部は、〔ポーランドのように〕第二次世界大戦で犠牲となった人々の神聖な記憶を利用することはない」。⁽¹⁷⁾

歴史認識をめぐるロシアとポーランドが対立する中、欧州議会は二〇一九年九月一日に「欧州の未来に向けた歴史的記憶を守る重要性」と題する決議を採択した。同決議によると、欧州はナチズムとスターリニズムという二つの全体主義の犠牲者であるにも拘らず、プーチン政権は過去を顧みず歴史認識に関するプロパガンダを展開している。同決

議は、一九三九年八月二三日の独ソ不可侵条約が第二次世界大戦の原因だったと表明し、大祖国戦争史観を真つ向から否定してみせた。¹³⁸

戦勝はロシア愛国主義の中核でもあることから、とりわけ欧州議会での決議採択を受け、プーチン大統領や政権閣僚等は歴史認識めぐる欧州からの異論に徹底抗戦する構えを示すことにした。

第三項 プーチンの反論

プーチン大統領は二月一日、組織委員会「勝利」の会合で怒りをぶちまけた。会合の冒頭で戦勝の意義を一通り述べたあと、「欧州議会はナチスの侵略者とソ連を同一視する決議を採択した。第二次世界大戦を起こしたのは、ナチス・ドイツと並んでソ連だと言わんばかりだ。一九三九年九月一日にポーランドを、一九四一年六月二二日にソ連を攻撃したのが誰だったのか、まるで忘れてしまったかのようだ」と語った。そして、「嘘に対して真実で答えていく。我々は、大祖国戦争に関する出来事や真実を語り続けていくほか、公文書資料を完全な形で開示・公開していく」と決議に反駁する方法を明かした。と同時に、「真実を歪曲する試みは終わっていない。こうした試みはナチストの間だけではなく、国際機関や欧州の機関にまで達してしまった」とも述べ、事態の複雑化を懸念した。最後にロシアを非難する近隣諸国を念頭に置いて、「読み書きできず、盲目的で、全く何も知らないと思える人々がいるようだ」と皮肉った。¹³⁹

プーチン大統領は欧州議会の決議に相当な不満を持っていたのか、二月一九日の内外メディアを対象にした毎年恒例の大型記者会見で自身の歴史認識を改めて披露した。数々の質問に答えつつ、『ロシア新聞』の記者から同決議について問われると、待っていたとばかりに次のように語った。「ソ連とナチス・ドイツを同一視するのは可笑しいことである。仏と英がチェコスロヴァキア国土の割譲を定めた協定をヒトラーと締結した際、ポーランドはどうしたか。反ファシズム統一戦線〔集団安全保障体制〕の創設を各国に訴えてきたソ連はどうしたのか。ナチス・ドイツの関心はポーランド

との関係構築ではなく、東部での領土拡大、つまりソ連との戦争であった。当時はそのことを理解せず、また反ヒトラー連合を創設もせず、ナチス・ドイツを東方に押しやった。……〔結果として〕独ソ不可侵条約が締結され、秘密議定書も付された。重要なことは、ソ連はナチス・ドイツと不可侵条約を締結した欧州で最後の国だということだ。他の国々は既に締結していた。……ソ連は秘密議定書に基づき確かにポーランドに入ったが、それはポーランド政府が軍隊及び自国領域への統制を失った後である。ソ連はポーランドを占領していない。……ドイツ軍が侵攻し撤退した後、ソ連軍が入った」⁽¹⁴⁾。

第四項 C I S 諸国との連帯強調

欧州議会の決議採択後、プーチン大統領は単独でロシアの歴史認識を説明してきたが、C I S 諸国に協力を求めることにした。大型記者会見の翌日一二月二〇日、C I S の首脳を集めた非公式会合をロシア第二の都市サンクトペテルブルクで開催し、大祖国戦争史観の正当性を訴えた。会合には、アゼルバイジャン、アルメニア、キルギス、ベラルーシ、タジキスタン、トルクメニスタン及びモルドヴァの首脳のほか、カザフスタンからナザルバエフ前大統領も出席し、計八名が会場に集った。

プーチン大統領は会合の冒頭で「〔決議は〕我々に関係している。なぜなら、我々はソ連の後継者だからだ。ソ連のことは、つまり我々のことなのだ」と各国との関係を強調した。その上で、独ソ不可侵条約が第二次世界大戦の原因だとする決議に疑問を投げかける。プーチン曰く、一九三四年一月の独波不可侵条約、一九三五年六月の英独海軍協定、一九三八年九月の英独声明、一九三八年一二月の仏独声明、一九三九年三月の独リトアニア不可侵条約、一九三九年六月の独ラトヴィア不可侵条約といった条約等があり、ソ連が唯一の条約締結国ではない。ソ連はあらゆる可能性が排除されてからナチス・ドイツとの条約締結に踏み切ったと強調した。⁽¹⁵⁾

プーチン大統領は機密指定が解除された公文書を読み上げる形で、当時の様子を語った。その際プーチンは、当時ドイツに駐在していたポーランドのリプスキ大使が「それ〔ユダヤ人をアフリカに送りだすこと〕が実現した暁には、ワルシャワに貴殿〔ヒトラー〕の銅像を建てる」とヒトラーに発言していた例を紹介し、欧州がひた隠しにする真実だと喝破した。そして、一九三九年九月一日にポーランドに、一九四一年六月二日にソ連に侵攻したのは誰だったのかと問い質した。⁽¹⁴⁾プーチンが約六〇分間に亘って語り続けた後、ナザルバエフ前大統領が口火を切って「公文書を体系化し、登録し、公開すべきだ」と指摘し、「歴史の書き換え」に対する方策を示した。⁽¹⁵⁾アゼルバイジャンのアリエフ大統領は、「ロシアとアゼルバイジャンの当該問題に対する態度は完全に一致している。我々は、大祖国戦争の真実を歪曲し、歴史を書き換える試み、そしてナチを英雄化する試みに断固戦っている」と語り、ロシアの立場に寄り添った。⁽¹⁶⁾

会合後、プーチンは各国首脳を別室に案内し、ロシアが保有するソ連の公文書や写真等を披露した。それらは、欧州の勢力バランスを変え、第二次大戦開戦の原因だとロシア側が捉える宥和政策についてまとめたものであった。⁽¹⁵⁾長時間に及ぶ反論・説明だったためか、『コメルサント』紙は、決議に不満を持つプーチンによる「歴史の授業」だとした。⁽¹⁶⁾

第五項 大祖国戦争史観の絶対性

プーチンはさらに反論を続ける。一二月二四日に国防省関係者を集めた会合で、当時のリプスキ大使を「反ユダヤ主義の豚野郎だ。これ以外に呼びようがない。この大使は反ユダヤ感情でヒトラーと協力し、ワルシャワにヒトラー像を建てると約束してユダヤ人を侮辱した」と罵った。⁽¹⁷⁾非難の対象はロシアではなく、ポーランドだと切り返した。一二月だけでも、確認できた限り四回も欧州議会の決議を公の場で非難しており、かなりの不満を持っていたことが窺える。二〇二〇年五月の戦勝記念式典は新型コロナの關係で延期となり、実施も危ぶまれる中、六月二四日に開催されるに至った。C I Sからウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン、ベラルーシ、モルドヴァの首脳が出席し、軍事パ

レードにはアゼルバイジャン、アルメニア、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ベラルーシ及びモルドヴァの兵士がパレードに加わった。⁽¹⁸⁾ コロナ感染拡大で一部首脳は式典を欠席したが、戦勝の共通性を意識して兵士を派遣したのだろう。ロシアはC I S 諸国の協力を得て、大祖国戦争史観の絶対性を発信したのであった。

同年六月には自身の考えをまとめた「第二次世界大戦七五周年の真の教訓」と題する長大な論文を英語とロシア語で発表し、⁽¹⁹⁾ ポーランドを名指しで改めて批判したほか、これまでの発言をまとめる形で「ソ連が不可侵条約を締結したのは最後であった」「西側の偽善的態度にも拘わらず、ソ連は最後まで反ヒトラー連合の創設に努めた」等とし、ロシアにおける大祖国戦争史観の絶対性を内外に向けて改めて発信した。歴史認識をめぐるロシアとポーランドの争いが激化の様相を呈しつつあるが、それでもプーチンは、欧州の批判は当を得ず、ロシアの立場が正当だとの立場を示した。

おわりに

以上のように、本稿では、歴史認識をめぐって近隣諸国との対立を深めるプーチン政権がC I S 諸国との協力を通じて大祖国戦争史観の正当性を図る取り組みを明らかにしてきた。以下では本稿の内容をまとめつつ、今後の展望を示すことにしたい。

プーチン大統領は、就任当初から戦勝の記憶をめぐってC I S 諸国との繋がりを意識した発言を行ったほか、二〇〇五年には記念メダルを制作したりして共通の記憶としての戦勝を訴えてきた。バルト諸国やポーランド等と歴史認識をめぐる摩擦が次第に激しくなると、戦勝の記憶を動員してC I S 諸国との協力を本格的に進めた。戦勝はC I S 諸国にとって自民族の誇りであり、大祖国戦争史観と微妙な異同がありながらも、ロシアが主張する歴史認識に理解を示し、共同声明の採択や共同事業を推進してきた。ロシアはC I S との協力の上で欧州による異論・反論に対抗し、自らの正

当性を担保した。

歴史認識問題が長期化する中、共同声明や記念メダルといった今までの取り組みを継続しつつ、声明等では「歴史歪曲に反対」といった言葉を使い近隣諸国を牽制してきた。これを受けCIS首脳も「歴史の書き換えに反対」と述べて、ロシアの立場に寄り添った。プーチン政権はCIS諸国と協力して戦勝の共通性を確認することで、欧州が主張する歴史認識に反駁してきた。以上のように本稿では、歴史認識の正当化に努めるプーチン政権の国際的取り組みの一端を明らかにした。

もともと、残された課題もある。本文でも簡単に確認したように、ウクライナやモルドヴァ等では指導者によって戦勝への意識や態度が異なることがあり、各国の内政事情等も見ながら、よりきめ細かな分析が求められていると言える。また、ロシア側の動きも重要である。二〇二二年一〇月に開催されたCIS首脳会合において、プーチン大統領は二〇二五年を「戦勝八〇周年の年」に宣言してはどうかと提案し、最終的に各国は賛同するに至った。⁽⁵⁾ プーチンは、CIS諸国と協力して大祖国戦争史観を正当化する新たな取り組みに着手しており、今後も維持する構えだ。歴史認識をめぐる対立が続く中、ロシア愛国主義の中核要素である大祖国戦争史観を擁護するロシア側の今後の取り組みを、ポスト・プーチンを見据えながら観察する必要があるだろう。

※引用文中の亀甲括弧は、引用者の補足説明を意味する。

注

(1) 例えば、橋本伸也『記憶の政治——ヨーロッパの歴史認識紛争』岩波書店、二〇一六年。橋本伸也編『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題——ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房、二〇一七年。

(2) 拙著『ロシアの愛国主義——プーチンが進める国民統合』法政大学出版局、二〇一八年。

- (3) *Гудков Д.* «Память» о войне и массовая идентичность россиян // *Память о войне 60 лет спустя. Россия, Германия, Европа*, М.: Новое литературное обозрение, 2005, С. 89.
- (4) *Малинова О.Ю.* Кто и как формирует официальный исторический нарратив: анализ российских практик // *Полития*, 2019, № 3, С. 108.
- (5) Коммерсантъ власть, № 24, 16 июля 2007, С. 19.
- (6) Российская газета, 7 мая 2014 г.
- (7) Российская газета, 4 июля 2020 г.
- (8) *Плеханов А.Д.* Разрушение пространства советского символического господства в постсоветской Украине // *Политическая наука*, 2018, № 3, С. 194-197.
- (9) 拙稿「歴史認識を巡るロシアの政治——対立と協調の交錯」『政治研究』第六八号、二〇二一年、一三二—一五七頁。
- (10) *Великая Отечественная война 1941-1945: энциклопедия.* / Гл. ред. М.М. Козлов. Редакция: Ю.Я. Барабаш, П.А. Жилин, В.И. Канатов и др., М.: Советская энциклопедия, 1985, С. 205.
- (11) *Тышков В.Д.* Великая Победа и советский народ: антропологический анализ // *Вопросы философии*, 2020, № 8, С. 15.
- (12) *シーの創設過程は* 田畑伸一郎・末澤恵美編 『シー——旧ソ連空間の再構成』国際書院、二〇〇四年。塩川伸明『国家の解体——ペレストロイカとソ連の最期』東京大学出版会、二〇二二年、第二章等を参照。
- (13) Российская газета, 19 августа 2009 г.
- (14) *Мальцев Д.В.* Содружество Независимых Государств: пространственно-организационная динамика // *Анализ и прогноз. Журнал ИМЭМО РАН*, 2019, № 3, С. 30.
- (15) Российская газета, 30 августа 2018 г.
- (16) UN Doc. A/RES/50/80.
- (17) *Мальцев Д.В.* Политика нейтралитета на постсоветском пространстве. На примере Туркменистана и Молдавии // *Свободная мысль*, № 6, 2019, С. 188.
- (18) 例として Elizabeth A. Wood, "Rethinking Memory: Vladimir Putin and the Celebration of World War II in Russia," *The Soviet and Post-Soviet Review*, Vol. 38, Iss. 2, 2011, pp. 172-200; Todd H. Nelson, "History as ideology: the portrayal of Stalinism and the Great Patriotic War in contemporary Russian high school textbooks," *Post-Soviet Affairs*, Vol. 31, No. 1, pp. 37-65; Anton Weiss-Wendt,

- Rubin's Russia and the Falsification of History: Reasserting Control over the Past*, Bloomsbury Academic, 2020.
- (19) Marcin Zaborowski et al., "Russia's Use of History as a Political Weapon," *Policy Paper*, No. 12, 2015, pp. 1-8.
- (20) 例へば、*伊藤 乙彦, Харитонова Н.И.* Проблема фальсификации истории на постсоветском пространстве // *Вестник Московского университета*. Серия 21. Управление (государство и общество), № 4, 2013, С. 122-123; *Дарионов А.З.* Власть и память: советское прошлое в исторической политике постсоветских режимов // *Власть*, 2021, № 6, С. 173-177.
- (21) 例へば、橋本 前掲書『記憶の政治』及び橋本 前掲編著『やまゆかりの中東欧・ロシアの歴史認識問題』。David J. Smith, "Wee from Stones: Commemoration, Identity Politics and Estonia's 'War of Monuments'," *Journal of Baltic Studies*, Vol. 39, Iss. 4, 2008, pp. 419-430; Tomas Kavaliuskas, "Different Meanings of May 9th, Victory Day over Nazi Germany for Russia and the Baltic States," in Nicolas Hayoz, Leszek Jesien and Daniela Koleva (eds), *20 Years after the Collapse of Communism: Expeditions, achievements and disillusions of 1989*, New York: Peter Lang Pub Inc, 2011, pp. 319-336; *Скачков Д.* Россия и Прибалтика: причины кризиса // *Международная жизнь*, № 9, 2018, С. 11-22.
- (22) *Давалюк К.А.* использование истории в контексте внешней политики современной России (2012-2018 гг.) // *Политика на маги в современной России и странах Восточной Европы*. Актеры, институты, нарративы / Под ред. И.А. Миллера, Д.В.Ефременко. СПб.: Издательство Европейского университета в Санкт-Петербурге, 2020, С. 96-121.
- (23) *Левченко А.С.* Исторический ревизионизм и память о Великой Отечественной войне в геополитическом противостоянии на западном фланге постсоветского пространства // *Постсоветские исследования*, Т. 4, № 7, 2021, С. 588-589.
- (24) 二〇二二年二月二四日にブーチン大統領はウクライナ侵攻を発表し、その理由の一つとしてウクライナの「非ナチ化」を挙げた。戦勝の記憶を持ち出しているようだが、本稿ではその点には触れず別個の課題とする。
- (25) *Российская газета*, 12 мая 1993 г.; 11 мая 1994 г.
- (26) *Российская газета*, 11 мая 2011 г.
- (27) 例へば、前掲拙著『ロシアの愛国主義』、三五―三九頁。塩川伸明『ロシアの連邦制と民族問題——多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』岩波書店、二〇〇七年、一五九頁。*Малинова О.Ю.* Политическое использование символа Великой Отечественной войны в постсоветской России: эволюция дискурса властвующей элиты // *Прошлый век*, № 1, 2013, С. 164-165.
- (28) *Ведомости Съезда народных депутатов Российской Федерации и Верховного Совета Российской Федерации* (Ведомости СНД РФ и ВС РФ), № 19, 1993, Ст. 700.

- (29) Ведомости СНД РФ и ВС РФ, № 21, 1993, Ст. 753.
- (30) Собрание актов Президента и Правительства Российской Федерации, № 31, 1993, Ст. 2865.
- (31) Собрание законодательства Российской Федерации, № 19, 1995, Ст. 1736; Российская газета, 7 мая 1995 г.
- (32) Российская газета, 10 августа 1993 г.
- (33) Российская газета, 11 мая 1995 г.
- (34) Российская газета, 11 мая 1995 г.
- (35) СЗРФ, № 20, 1996, Ст. 2325; № 19, 1997, Ст. 2220; № 19, 1998, Ст. 2075; Российская газета, 12 мая 1999 г.
- (36) エリツイン政権下における戦勝記念の特徴に関する分析は、別個の課題とすべ。
- (37) エリツイン大統領の演説は、Российская газета, 12 мая 1999 г. を参照。
- (38) Независимая газета, 11 июля 2000 г.
- (39) Концепция внешней политики Российской Федерации // Администрация Президента России, 15 июля 2008 (<http://kremlin.ru/acts/news/785>). 各段、本稿に参照したウヤムズーチは二〇一三年一月五日時点に全く閲覧可能。
- (40) 前掲拙稿「歴史認識をめぐるロシアの政治」三七—三八頁。
- (41) Выступление на параде, посвященном 55-й годовщине Победы в Великой Отечественной войне // Администрация Президента России, 9 мая 2000 (<http://kremlin.ru/events/president/transcripts/21421>).
- (42) Владимир Путин поздравил глав государств СНГ с 55-летием Победы // Администрация Президента России, 9 мая 2000 (<http://kremlin.ru/events/president/news/38136>).
- (43) Президент России направил лидерам государств СНГ поздравительные послания по случаю празднования 58-й годовщины Победы в Великой Отечественной войне // Администрация Президента России, 9 мая 2003 (<http://kremlin.ru/events/president/news/28606>). О поздравлениях лидерам Содружества Независимых Государств // Администрация Президента России, 8 мая 2002 (<http://kremlin.ru/supplement/3490>).
- (44) Выступление на военном параде, посвященном 59-й годовщине Победы в Великой Отечественной войне // Администрация Президента России, 9 мая 2004 (<http://kremlin.ru/events/president/transcripts/22453>).
- (45) UN Doc. A/59/L.28/Rev.2.
- (46) UN Doc. A/RES/59/26.

- (47) Решение о юбилейной медали «60 лет Победы в Великой Отечественной войне 1941-1945 гг.» // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств, 25 октября 2010 (<https://cis.minsk.by/page/show?id=326>).
- (48) Война. Народ. Победа: материалы международной научной конференции. Москва 15-16 марта / Отв. ред. М.Ю. Мятков и Ю.А. Никифоров, М.: Наука, 2008, С. 12.
- (49) Начало заседания Совета глав государств СНГ // Администрация Президента России, 8 мая 2005 (<http://kremlin.ru/events/president/transcripts/22957/>).
- (50) *Путин В.В.* Избранные речи и выступления, М.: Книжный мир, 2008, С. 292.
- (51) *Малинова О.Ю.* Великая отечественная война как символический ресурс: эволюция отображения в официальной риторике 2000-2010 гг. // Россия и современный мир, 2015, № 2, С. 13.
- (52) Выступление на Военном параде в честь 63-й годовщины Победы в Великой Отечественной войне // Администрация Президента России, 9 мая 2008 (<http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/30>).
- (53) 例文 塩川伸明『民族の言語——多民族国家の連の興亡』岩波書店 二〇〇四年 一〇四—一〇九頁。
- (54) Поздравление Президента Беларуси с Днем Победы // Президент Республики Беларусь, 9 мая 2005 (<https://president.gov.by/ru/events/rozdravlenie-prezidenta-belarusi-s-dnem-pobedy-5998>).
- (55) *Миралиева С.Р.* Великая Отечественная война и ее трактовка в Азербайджанской Республике // Постсоветские исследования, Т. 3, № 5, 2020, С. 407.
- (56) *Енокян А.В.* Историческая память о Великой Отечественной войне в Армении // Постсоветские исследования, Т. 3, № 5, 2020, С. 407.
- (57) *Джигин А.В.* Великая Отечественная война в риторике лидеров стран СНГ // Известия Уральского государственного университета. Сер. 1, Проблемы образования, науки и культуры, 2011, № 1, С. 87.
- (58) Там же, С. 88-89.
- (59) Ведомости Олий Мажлиси Республики Узбекистан, 1999, № 3, Ст. 68.
- (60) *Ионов Б.В. Харитонова Н.И.* Проблема фальсификации истории на постсоветском пространстве // Вестник Московского университета. Серия 21. Управление (государство и общество), № 4, 2013, С. 114-116.
- (61) Великая Отечественная война в исторической памяти народов: изучение, интерпретация, уроки прошлого: сборник мате

- риалов Всероссийской научно-практической конференции с международным участием / От ред. А.А.Николаева, Ин-т истории СО РАН, Новосибирск: Параллель, 2020, С. 508.
- (32) В Узбекистане широко отмечается День памяти и почестей и 72-я годовщина великой Победы // ТАСС, 9 мая 2017 (<https://tass.ru/obshchestvo/4240002>).
- (33) *Ионов, Харитонюк*, Указ статья, С. 122-123.
- (34) Российская газета, 29 октября 2004 г.
- (35) Ющенко объявил 28 октября Днем освобождения Украины от фашистов // РИА Новости, 21 октября 2009 (<https://ria.ru/20091021/189927120.html>).
- (36) В Ющенко отказался отменить празднование Дня Победы // РБК, 31 мая 2008 (<https://www.rbc.ru/politics/31/05/2008/5703сссд79470ea76ae3f>).
- (37) *Братчик А.С.* Проблема фальсификации истории и итогов Великой Отечественной войны на Украине // Постсоветские и следования, Т. 4, № 1, 2021, С. 45.
- (38) В Янукович: С Победы началось строительство единой Европы // РБК, 9 мая 2009 (<https://www.rbc.ru/politics/09/05/2011/5703e71b9a79473c0d1d1d5c>).
- (39) *Осадчая Г.И., Селгзнев И.А., Киреев Е.Ю., Черникова А.А.* Великая Отечественная война в исторической памяти молодежи стран-участниц евразийской интеграции // Социально-гуманитарные знания, 2020, № 3, С. 15.
- (40) Там же, С. 17.
- (41) Там же, С. 17.
- (42) *Осадчая, Селгзнев, Киреев, Черникова*. Указ. статья, С. 20.
- (43) Там же, С. 21.
- (44) Там же, С. 22.
- (45) Там же, С. 24.
- (46) *Умаров И.Ш.* Взгляд Узбекистана во Второй мировой войне // Гуманитарные чтения в Политехническом университете. В 2 ч. Ч. I: сборник трудов Всероссийской научно-практической конференции, СПб.: ПОЛИТЕХ-ПРЕСС, 2021, С. 189.
- (47) ティームール・ダダバエフ 『記憶の中のソ連——中央アジアの人々の生きた社会主義時代』筑波大学出版会、二〇一〇年、七三—七

- (81) 65 лет Великой Победы. Вторая Мировая Война глазами украинцев // Research & Branding Group, 29 апреля 2010 (<https://rb.com.ua/blog/65-let-veikoj-robedy-uchoda-pitovchajna-glazami-ukraincev/>).
- (82) День Победы // Research & Branding Group, 7 мая 2013 (<https://rb.com.ua/blog/den-robedy/>).
- (83) Мониторинг общественного мнения: экономические и социальные перемены, № 3, 2010, С. 94.
- (84) Интервью первого заместителя Министра иностранных дел России А.И.Денисова агентству «Интерфакс» 8 октября 2008 года по вопросам предстоящего заседания Совета глав государств СНГ // МИД России, 9 октября 2008 (https://www.mid.ru/ru/foreign_policy/news/1741960/).
- (85) Решение о единой юбилейной медали «65 лет Победы в Великой Отечественной войне 1941-1945 гг.» // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств (<http://cis.minsk.by/press/2/doc/2518#text>).
- (86) Решение о Плане основных мероприятий по подготовке и празднованию 65-й годовщины Победы в Великой Отечественной войне 1941-1945 годов // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств (<https://cis.minsk.by/press/2/doc/2512#text>).
- (87) СНГ 2010 год будет объявлен Годом ветеранов - источник // РИА Новости, 7 октября 2009 (<https://ria.ru/20091007/187860366.html>).
- (88) 日本外務省は二〇二二年五月一三日「ロシア語読みの「キシニョフ」からウクライナ語読みの「キシナウ」に変更した(「読売新聞」二〇二二年五月一四日朝刊)。
- (89) Брифинг официального представителя МИД России А.А.Нестеренко, 8 октября 2009 года // МИД России, 8 октября 2009 (https://www.mid.ru/ru/foreign_policy/news/1638600/).
- (90) Российская газета, 5 мая 2010 г.
- (91) *Жаркынбаява Р.С.* Великая Отечественная война: социокультурная память и commemorative практики в постсоветском Казахстане (гендерный аспект) // Женщина в российском обществе, № 1, 2017, С. 112.
- (92) Коммерсантъ, 19 апреля 2010 г.
- (93) *Сергеев А.И.* Межпарламентская Ассамблея СНГ как фактор укрепления интеграционного взаимодействия // Диалог: по литика. право. экономика, № 1, 2017, С. 13.

- (17) Вестник Совета Федерации, № 5, 2010, С. 30.
- (18) Вестник Совета Федерации, № 5, 2010, С. 32-33.
- (19) *Кролов И.А.* Межпарламентская Ассамблея государств - участников Содружества независимых государств - 65-летию Великой Победы // *Материаловедение. Энергетика*, № 2-1, 2010, С. 14.
- (20) Там же, С. 15.
- (21) *Материаловедение. Энергетика*, № 2-1, 2010, С. 16-17; Вестник Совета Федерации, № 5, 2010, С. 36-37.
- (22) Коммерсантъ, 21 января 2010 г.
- (23) Состоялся неформальный саммит Содружества Независимых Государств // Администрация Президента России, 8 мая 2010 (<http://kremlin.ru/events/president/news/7678>).
- (24) Коммерсантъ, 11 мая 2010 г.; Главы иностранных государств, правительства и международных организаций, принимающих участие в праздновании 65-летия Победы // Администрация Президента России, 9 мая 2010 (<http://www.kremlin.ru/supplement/546>).
- (25) Дорогие ветераны! Вы завоевали мир для страны, всей планеты. Дали нам саму возможность жить. Низкий вам поклон // Администрация Президента России, 9 мая 2010 (<http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/7685>).
- (26) *Савинов И.В.* Культурная дипломатия в странах СНГ: глобализационный контекст // *Евразийская интеграция: Экономика. Право. Политика*, № 8, 2010, С. 158.
- (27) Обращение глав государств СНГ в связи с 70-летием начала Великой Отечественной войны // Администрация Президента России, 21 июня 2011 (<http://www.kremlin.ru/events/president/news/11653>).
- (28) Соглашение об увековечении памяти о мужестве и героизме народов государств - участников Содружества Независимых Государств в Великой Отечественной войне 1941-1945 годов // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств (<https://cis.minsk.by/geestv2/doc/3151#text>).
- (29) Заявление глав государств - участников Содружества Независимых Государств в связи с 20-летием образования СНГ // Администрация Президента России, 3 сентября 2011 (<http://kremlin.ru/supplement/1021>).
- (30) Российская газета, 5 сентября 2011 г.
- (31) Сборник аналитических, информационных и научных материалов о деятельности СНГ, Минск, 2013, С. 27-28.

- (85) Прямая линия с Владимиром Путиным // Администрация Президента России, 25 апреля 2013 (<http://kremlin.ru/events/president/news/17976>).
- (86) СЭРФ, № 17, 2013, Ст. 2118.
- (87) Заседание Совета глав государств СНГ // Администрация Президента России, 25 октября 2013 (<http://www.kremlin.ru/events/president/news/19489>).
- (88) Сборник информационно-аналитических материалов СНГ, Минск, 2014, № 2, С. 12.
- (89) Решение Совета глав государств СНГ о единой юбилейной награде, учрежденной к 70-й годовщине победы советского народа в Великой Отечественной войне 1941-1945 годов (25 октября 2013 года, г. Минск) // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств, 31 декабря 2014 (<https://cis.minsk.by/page/show?id=19171>).
- (90) Заседание Российского организационного комитета «Победа» // Администрация Президента России, 12 июля 2013 (<http://kremlin.ru/events/president/transcripts/18714>).
- (91) Решение Совета глав государств СНГ о Плана основных мероприятий по подготовке и празднованию 70-й годовщины Победы советского народа в Великой Отечественной войне 1941-1945 годов (25 октября 2013 года, г. Минск) // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств, 31 декабря 2014 (<https://cis.minsk.by/page/show?id=19169>).
- (92) *Лавров С.В.* Великая Победа - источник нашей национальной гордости // Международная жизнь, 2015, № 5, С. 3.
- (93) *Курлыко Ф.Ф.* Празднования 70-летия Победы как фактор консолидации усилий по противостоянию современным вызовам и угрозам // Вестник КРСУ, Том 15, 2015, № 5, С. 4.
- (94) Вестник Межпарламентской Ассамблеи, № 3, 2015, С. 20.
- (95) Там же, С. 27-35, 38-44.
- (96) Вестник Межпарламентской Ассамблеи, № 2, 2015, С. 4-5.
- (97) *Далухина К. В.* Кремле озвучили программу международных встреч президента // Российская газета, 6 мая 2015 (<http://rg.ru/2015/05/06/vizit-site.html>).
- (98) *Далухина К. Песков:* Порошенко не будет на встрече лидеров СНГ в Москве 8 мая // Российская газета, 30 апреля 2015 (<https://rg.ru/2015/04/30/potoshenko-site-aponsh.html>).
- (99) Фотграффи: встреча глав государств - участников СНГ // Администрация Президента России, 8 мая 2015 (<http://kremlin.ru>).

- [tu/events/president/news/49434/photos\).](http://tu/events/president/news/49434/photos)
- (21) Встреча глав государств - участников СНГ // Администрация Президента России, 8 мая 2015 (<http://kremlin.ru/events/president/news/49434>).
- (22) Рабочий визит в Российскую Федерацию // Президент Республики Беларусь, 8 мая 2015 (<https://president.gov.by/tu/events/tabochij-vizit-v-rossijskiju-federaciju-11335>).
- (23) Коммерсантъ, 12 мая 2015 г.
- (24) *Жаркынбаева*, Указ статья, С. 113.
- (25) Фотографии: парад в честь 70-летия Великой Победы // Администрация Президента России, 9 мая 2015 (<http://kremlin.ru/events/president/news/49437/photos>).
- (26) Мы преклоняемся перед всеми, кто насмерть стоял за каждую улицу, каждый дом, каждый рубль Отчизны // Администрация Президента России, 9 мая 2015 (<http://kremlin.ru/events/president/transcripts/49438>).
- (27) Документы, подписанные на заседании Совета глав государств Независимых Государств // Администрация Президента России, 11 октября 2017 (<http://www.kremlin.ru/supplement/5239>).
- (28) Коммерсантъ, 11 октября 2019 г.
- (29) Обращение глав государств - участников Содружества Независимых Государств к народам стран Содружества и мирового сообщества в связи с 75-летием Победы советского народа в Великой Отечественной войне 1941-1945 годов // Исполнительный комитет Содружества Независимых Государств, 11 октября 2019 (<https://cis.minsk.by/news/12416>).
- (30) Заседание Совета глав государств СНГ // Администрация Президента России, 11 октября 2019 (<http://www.kremlin.ru/events/president/news/61782>).
- (31) Касым-Жомарт Токаев принял участие в заседании Совета глав государств СНГ // Официальный сайт Президента Республики Казахстан, 11 октября 2019 (<https://www.akorda.kz/tu/events/international-compassion/foreign-visits/kasym-zhomart-tokayev-primul-uchastie-v-zasedanii-soveta-glav-gosudarstv-sng>).
- (32) *Другович А.В.* Многосторонняя дипломатия государств-участников Содружества Независимых Государств (на примере заседания Совета глав государств в октябре 2019 г.) // Беларусь в современном мире: материалы XVIII Международ. науч. ко нф., посвящ. 98-летию образования Белорус. гос. ун-та, Минск: БГУ, 2019, С. 443.

- (133) Коммерсантъ, 2 сентября 2019 г.
- (134) Там же.
- (135) *Фаруллинов Р.* День памяти: почему Польша не пригласила Россию // Газета.ру, 1 сентября 2019 (https://www.gazeta.ru/roitics/2019/09/01_a_12617245.shtml?updated).
- (136) Известия, 2 сентября 2019 г.
- (137) Известия, 2 декабря 2019 г.
- (138) Official Journal of the European Union, С 171, Vol. 64, 6 May 2021, pp. 25-29.
- (139) Заседание Российского организационного комитета «Победа» // Администрация Президента России, 11 декабря 2019 (<http://www.kremlin.ru/catalog/keywords/117/events/62293>).
- (140) Российская газета, 20 декабря 2019 г.; Большая пресс-конференция Владимира Путина // Администрация Президента России, 19 декабря 2019 (<http://www.kremlin.ru/events/president/news/62366>).
- (141) Российская газета, 23 декабря 2019 г.
- (142) Там же.
- (143) Неформальный саммит СНГ // Администрация Президента России, 20 декабря 2019 (<http://kremlin.ru/events/president/news/62376>).
- (144) *Мирагаева С.Р.* Великая Отечественная война и ее трактовка в Азербайджанской Республике // Постсоветские исследования, Т. 3, № 5, 2020, С. 451.
- (145) Историко-документальная выставка «1939 год. Начало Второй мировой войны» // Администрация Президента России, 20 декабря 2019 (<http://kremlin.ru/supplement/5467>).
- (146) Коммерсантъ, 23 декабря 2019 г.
- (147) Известия, 25 декабря 2019 г.
- (148) Российская газета, 25 июня 2020 г. キルギス大統領は代表団にコロナ感染者がいたことが判明し、モスクワ到着後すぐに帰国した。
- (149) Российская газета, 19 июня 2020 г.
- (150) Российская газета, 17 октября 2022 г.